

知る・考える・ネパール！

氏名:長谷川 太郎

学校名:枚方市立殿山第一小学校

担当教科:全教科

実践教科:社会・音楽・家庭・国語(書写)・総合的な学習

時間数:7時間

対象学年:6年(2学級)

人数:52人(2学級)

1. 教師海外研修を通して感じたこと

私は、教師生活のうち3年間を北京日本人学校で過ごした。中国での経験を日本の子どもたちに還元するのが私の役目であると考え、帰国後、中国の町の様子、人々の考え方等を積極的にクラスで伝えてきた。日本人にとって中国のイメージはあまりよくないものかもしれないが、中国人にとって日本はそうではない。日本の政治に関しては批判的であっても、多くの中国人は日本文化が好きで、憧れすらもっている人もいる。日本製のものを持つのがステータスだし、日本食レストランには行列ができていた。タクシーに乗っていて、私が日本人だとわかると、「この歌、知ってるか？」と山口百恵の歌を運転手から延々と歌って聴かされたこともある。

そんな中国の体験談をクラスで話すと、子どもたちは目を輝かせて聞いていたし、失敗談を話すと大笑いしていた。中国に対する理解や興味を高めることはできたと思う。しかし、子どもたちは常に聞き手であり、自ら問題意識をもったり、解決策を考えたりさせる段階までは至っていない。開発教育や参加型学習の方法を習得し、今後の授業に生かしたいと考えたのが、教師海外研修に応募した動機である。

10日間の研修はとても充実したものだ。特に心に残ったのは、現地校で授業をしたこととホームステイである。

現地校での授業では、ネパールの子どもの反応が素直でかわいらしく、何をしても楽しんでくれて、教師として喜びを感じた瞬間だった。日本文化の体験として、子どもたち一人ひとりに筆を使って自分の名前を書いてもらった。書き終わったあと、子どもたちがみんな、「うまく書けたでしょ?」「私の字はどう?」と、感想を言ってほしくてわざわざ見せに来るのがほほえましかった。誇らしそうな子どもたちの笑顔は忘れられない。

バジャラバラヒ村でのホームステイでは、当初は2日間無事に過ごせるか不安だったが、最終日にはカトマンズに帰りたくないと思うほど心地いい時間を提供してもらった。せっかくの機会なのでいろんなことを体験したいと思い、ヤギの餌やりや牛の乳しぼりなど、たくさん無理を言ったが、すべて快く受け入れてもらった。ネパールの人々の親切さと懐の深さを感じた。

2. 授業実践

【1】単元のテーマ・目標

- ・ネパールの文化を実際に体験することを通して、異文化に触れさせるとともに、日本との相違点・共通点に気づかせ、それぞれのよさを認められるような異文化理解の感覚を育む。
- ・国際協力において、日本で行われていることをそのまま外国に持ち込むのではなく、現地の状況や文化に即した形で行うことの大切さを理解させる。
- ・外国の問題について考えさせることで、国際貢献への意識を芽生えさせる。

【2】単元設定の理由

近年、日本では外国人観光客が急激に増加している。街中で外国語を聞く機会も多くなった。子どもたちが大人になるころには、さらに国際化が進んでいるだろう。そのような環境で生活していく子どもたちにとって、異文化を受け入れ、よさを認められるような感覚を身につけておくことは必要不可欠であると考えます。

おそらく日本の6年生の子どもたちは、ネパールという国について知っていることはほとんどない。ネパールがどこに位置するのかすら知らない児童が多いと想像する。教師海外研修で私が自分自身で直に触れた、ネパールの文化や人々の様子を日本の子どもたちに伝え、初めて接する異文化に関心をもたせ、国際社会を生きる子どもたちの視野を広げたい。

小学校では担任が複数の教科を教えるという特性を生かし、本単元では、教科を限定せず、教科横断的に授業を行う。全7回のうち前半5回のテーマは「知る」。ネパールという国について紹介し、ネパールの文化を体験させる。社会科で地理や気候、人々の様子について伝えたあと、音楽科でネパールの音楽を歌わせ、家庭科でネパール料理を作らせる。書写では、ネパールで使用されているデーヴァナーガリー文字を書くことに挑戦させる。五感を使った体験をさせ、どっぷりとネパール文化に浸らせたい。

後半2回のテーマは「考える」。総合的な学習として、国際協力について考えさせる。2015年のネパール地震について紹介し、死者は9000人に上るなど甚大な被害があり、豊かな文化が失われたこと、現在も復興の途中にあることを伝える。同じく地震が頻発する日本に暮らす者として、防災という観点でどのような支援ができるかを考えさせる。その際、日本で行われていることをそのまま外国に持ち込むのではなく、現地の状況や文化に即した形で行うことの必要性についても理解させる。

本単元の学習を通し、異文化理解の感覚を育むとともに、国際協力について考える第一歩としたい。

【3】展開計画（全7時間）

時	テーマ・ねらい	主な活動・内容	使用教材
1	社会科「ネパールふしぎ発見！」 ・場所や人口など、ネパールという国の概要を知る。	・ネパールという国について知っていることを発表する。 ・ネパールの概要を知る。 ・ネパールの人々や町の様子を知る。	・ホワイトボード ・世界地図 ・国旗 ・紙幣 ・写真
2	音楽科「ネパールの言葉・音楽」 ・ネパールの言葉・音楽を体験しながら知る。	・ネパール語のあいさつを知る。 ・デーヴァナーガリー文字を知る。 ・デーヴァナーガリー文字で自分の名前を書く。 ・ネパールの歌「レッサムフィリリ」を歌う。 ・ネパールの太鼓・マダルを演奏する。	・「レッサムフィリリ」の歌詞 ・マダル
3・4	家庭科「ネパールの料理」 ・ネパールの料理を体験しながら知る。	・ネパールの料理・ダルバートを知る。 ・スパイスの匂いを嗅ぐ。 ・ダルバートを作る。 ・ダルバートを食べる。	・ネパールの台所の写真 ・ダルバートの材料
5	書写「習字交流」 ・ネパールの文字を体験しながら知る。	・現地校での習字の授業の様子を知る。 ・自分たちの書いた習字をネパールに送ることを知る。 ・習字で、ネパールの子どもの名前を漢字で書くとともに、自分の名前をデーヴァナーガリー文字で書く。	・習字道具 ・半紙 ・写真

6	総合的な学習「ネパールの防災（1）」 ・ネパールの防災に協力できることを考える。	・現地で撮影した写真を見て、ネパールの人々や町の様子を知る。 ・ネパール地震について知る。（日時・震度・被害） ・地震前と後の町の様子を写真で見比べる。 ・ネパールの防災のためのアイデアを、個人で考える。 ・グループで考えを出し合い、まとめる。	・ネパールの写真（地震前・地震後） ・画用紙 ・ふせん（青） ・マジックペン（青）
7	総合的な学習「ネパールの防災（2）」 ・ネパールの様子をふまえ、ネパールの防災に協力できることを考える。	・前時で各班から出た、防災のためのアイデアを知る。 ・ネパールの町の様子やデータを紹介し、自分たちのアイデアがそのまま使えないことを知る。 ・ネパールの状況をふまえ、自分たちのアイデアを修正する。 ・国際協力で大切なことを考える。	・ネパールの写真（地震前・地震後） ・画用紙 ・ふせん（赤） ・マジックペン（赤）

第1時

社会科「ネパールふしぎ発見！」

ねらい 場所や人口など、ネパールという国の概要を知る。



活動・内容

- ①ネパールという国について知っていることを発表する。
- ②めあてを知る。
「ネパールという国を知ろう。」
- ③クイズに答えながら、ネパールの概要を知る。
（場所・正式名称・首都・国旗（デザインの意味）・人口・言葉・通貨（デザインされている動物）・スポーツ（カバディの体験）・遊び・料理）
- ④現地で撮影した写真を見て、ネパールの人々や町の様子を知る。
- ⑤日本と似ているところ・違うところを考え、発表する。
- ⑥ふりかえり

所感

子どもたちにとって初めて知る内容が多かったが、クイズ形式で紹介したことで、興味を持続させることができた。私がネパールで触れた、人々のやさしさについて紹介したところ、「ネパールの人はやさしくていいなあと思った。」という感想をもっていた。

第2時

音楽科「ネパールの言葉・音楽」

ねらい ネパールの言葉・音楽を体験しながら知る。



活動・内容

- ①めあてを知る。
「ネパールの言葉・音楽を知ろう。」
- ②ネパール語のあいさつを知る。
- ③デーヴァナーガリー文字を知る。
- ④デーヴァナーガリー文字で自分の名前を書く。
- ⑤ネパールの歌「レッサムフィリリ」を歌う。
- ⑥ネパールの太鼓・マダルを演奏する。
- ⑦日本の言葉・音楽と似ているところ・違うところを考え、発表する。
- ⑧ふりかえり

所感

デーヴァナーガリー文字を書くことは日本人には難しいが、その分、子どもたちは意欲を掻き立てられるようで、競うようにていねいに書いていた。レッサムフィリリのネパール語の歌詞も難解だが、日本語訳を紹介したところ、「レッサムフィリリという音楽が、ネパール語では歌詞がよくわからなかったけど、日本語にするとすごくいい歌詞だった。」と、歌詞のよさを理解していた。「他の国でも、音楽を通して、楽しんだり、心を通わせたりすることができるということがわかった。」と、音楽の魅力に気づいている児童もいた。

第3・4時

家庭科「ネパールの料理」

ねらい ネパールの料理を体験しながら知る。

活動・内容

- ①めあてを知る。
「ネパールの料理を知ろう。」
- ②ネパールの料理「ダルバート」を知る。
- ③スパイスの匂いを嗅ぐ。
- ④「ダルバート」を作る。
- ⑤「ダルバート」を食べる。
- ⑥日本の料理と似ているところ・違うところを考え、発表する。
- ⑦ふりかえり

所感

調理実習で、スパイスを混ぜ合わせてダルバートを作らせた。家庭や給食のカレーを食べ慣れている子どもたちは、「ネパールのカレーはスパイスがとても辛かった。」など、味の違いに戸惑っているようであったが、同じ料理でも、国によってまるで異なることがあるのを知ったのはいい経験になったと思う。



第5時

書写「習字交流」

ねらい ネパールの文字を体験しながら知る。

活動・内容

- ①現地校での習字の授業の様子を知る。
- ②めあてを知る。
「ネパールの子どもたちと習字で交流しよう。」
- ③自分たちの書いた習字をネパールに送ることを知る。
- ④習字で、ネパールの子どもの名前を漢字で書くとともに、自分の名前をデーヴァナーガリー文字で書く。
- ⑤日本の文字と似ているところ・違うところを考え、発表する。
- ⑥ふりかえり

所感

ネパール滞在中、現地校で習字の授業を行った。日本の子どもたちには、手本となる文字を習字で書かせた。完成した作品はネパールに送ることを伝えると、プレッシャーに感じて何枚も書き直す児童がいるほど熱心に取り組んでいた。



第6時

総合的な学習「ネパールの防災（1）」

ねらい ネパールの防災に協力できることを考える。

活動・内容

- ①現地で撮影した写真を見て、ネパールの人々や町の様子を知る。
- ②ネパール地震について知る。（日時・震度・被害）
- ③地震前と後の町の様子を写真で見比べる。
- ④めあてを知る。
「ネパールの防災に協力できることを考えよう。」
- ⑤ネパールの防災のためのアイデアを、個人で考える。
- ⑥グループで考えを出し合い、まとめる。
- ⑦発表する。
- ⑧ふりかえり

所感

これまでの授業は、ネパールの豊かな文化を体験しながら学んできた。本時では、ネパール地震で大きな地震があったことを紹介し、その影響で文化が一部失われたことを伝えた。これまでネパール文化に慣れ親しんできたため、ショックを受けている児童もいた。ネパールで活用できる防災のアイデアを考えさせたところ、避難訓練のしかたを伝える・緊急地震速報の仕組みを作るなど、日本で行われていることをそのままネパールに持ち込むことを考える児童が多かった。



第7時

総合的な学習「ネパールの防災（2）」

ねらい ネパールの様子をふまえ、ネパールの防災に協力できることを考える。

活動・内容

- ①前時で各班から出た、防災のためのアイデアを知る。
- ②ネパールの町の様子やデータを紹介し、自分たちのアイデアがそのまま使えないことを知る。
- ③めあてを知る。
「ネパールの様子をふまえ、ネパールの防災に協力できることを考えよう。」
- ④ネパールの状況をふまえ、自分たちのアイデアを修正する。
- ⑤発表する。
- ⑥ふりかえり
- ⑦国際協力で大切なことを考える。

児童の感想

- ・「日本では自分の身が守れる方法でも、ネパールでは守れないこともあるとわかった。」
- ・「ネパールにはネパール語をしゃべれない人がいて、みんながわかるようにかんたんに伝えないといけないということがわかった。」
- ・「防災に協力できることを考えるとき、自分の国ではなく、その国に合わせて考えたほうがいい。」
- ・「またネパールの何かをやってみたい。」
- ・「ぼくもネパールに行ってみたい。」
- ・「日本も地震が多い国だからこそ、ネパールの人に知っていることを伝えたいと思った。」
- ・「地震とか災害に協力できることがあればしたい。」

所感

ネパールで視察した学校では、机が古くなっていて、地震のときに下に隠れても体を守ることができない。前時で考えた防災のアイデアが通用しないような状況を提示し、どのように工夫すればよいかを考えさせた。子どもたちは、「地震が起こったら、すぐに外に出るようにする」など、ネパールの様子をふまえてアレンジしていた。児童のアイデアが実際に利用できるかどうかはわからないが、国際協力を考えるとき、現地の状況や文化を理解し、それに合わせて行うことの大切さを理解させることはできたと考える。



3. 成果と課題

(1) 成果

①異文化理解

単元のはじめに、子どもたちにネパールについて知っていることを尋ねたところ、出た意見は特徴的な国旗とヒマラヤくらいで、他には何も思い浮かばないようだった。身近ではないネパールという国について授業を行ったことで、世界には日本と全く異なる文化をもつ国があることを理解させることができた。

②五感を使った経験

ネパールの文化を教師が一方的に語るのではなく、子どもたちに目・耳・鼻・口を使って経験させたのがよかった。ふだん自分たちが体感している日本文化との相違点・共通点に自然に思いを巡らせているようだった。

③子どもたちからの意見の提示

第6・7時において、防災のアイデアをまずは自由に考えさせたあと、ネパールの現状を紹介し、修正させるという手順を踏んだことで、教師が押しつけるのではなく、子どもたちの中から、国際協力を考える際には現地の状況や文化に即した形で行うことが必要であるという意見を出させることができた。

④保護者への働きかけ

第7時を参観日に行ったことで、保護者にも国際協力について考えてもらうことができた。JICAの活動について知ってもらうきっかけにもなったと思う。

(2) 課題

①文化の再現

ネパールの文化をそのまま日本で再現するのは難しかった。例えば、ダルバートの調理実習では、肉が使えない、手で食べられない、時間・お金に制約があるといった事情があり、何で代用し、どこを妥協点にするかを考えるのに苦労した。鶏肉の代わりにウィンナーを使ったが、私がネパールで食べたジュシーなチキンタルカリとはとはかけ離れたものになってしまった。ネパールの文化の豊かさを十分に伝えられたかどうかは疑問である。

②他国についての意見の提示

今回の授業でネパールについて取り上げたことで、ネパールの文化を理解させ、ネパールの防災について考えさせることができた。しかし、授業後の文章を読んでいると、あくまでネパールという一つの国にのみに言及しているものが多く、他の外国に思いを馳せるところまでは至っていないようだった。再度実施する際には、単元の最後でいくつかの国について触れることで、国際協力の対象がどこであっても、現地の状況や文化を理解し、それに合わせて行うことの大切さを理解させたい。

(3) 備考

今後は、中国の開発における課題は何か、自分たちにできる取り組みはどんなことかを考えさせる授業を行いたい。近年、中国の発展は著しく、私の滞在期間中にも、一ヶ月経つと、新しいビルができて景色がまるで変わっているということがあった。一方、中国は開発について多くの課題を抱える国である。大気汚染は非常に深刻であり、空気が真っ白で、隣の建物が見えないという日もあった。中国国内だけでなく、今や風向きによって日本にも影響が出てきている。過去の日本の公害対策の教訓をもとに、日本ができることは数多いと思う。自らの体験談を交えながら、中国をテーマに開発教育を実践したい。